



日本学士院ニュースレター

明六社だより

トピックス:

- 平成23年度日本学士院賞が決定しました
- 第7回日本学士院学術奨励賞を授与しました
- 学びのスメンリーズ、若者向け講演会を実施しました
- 新会員12名を選定しました
- 春の公開講演会を松山で開催します



『化学新書』（川本幸民訳）

川本幸民(文化7年(1810)－明治4年(1871))は、幕末・明治維新期の蘭学者で、日本の化学の祖ともいらわれています。『化学新書』は、ドイツの農芸学者ストックハルトの化学書のオランダ語訳を幸民がさらに和訳したものです。内容は、初等化学の全域にわたり、本書で初めて「化学」という語が書名に使われました。今回、『化学新書』を含む本院所蔵の川本幸民関係資料が公益社団法人 日本化学会の認定する化学遺産に登録されました。(詳細は2ページをご覧ください。)

目次:

川本幸民資料の化学遺産登録	2	所蔵資料の紹介 (藤田貞資関係資料)	13
平成23年度日本学士院賞	3	第54回公開講演会のお知らせ	14
第7回日本学士院学術奨励賞	6	客員来日記念講演会のお知らせ	14
講演会・記念展レポート	8	外国アカデミー等との交流	15
日本学士院授賞100周年記念展	9	会館施設の利用案内	15
第26回国際生物学賞授賞式	9	寄附のご案内	15
新会員選定	10	会員・客員の逝去	16
会員寄稿	12	編集後記	16

川本幸民資料の化学遺産登録

本院所蔵資料の川本幸民関係資料の中から『化学新書』を含む14点の資料が、平成23年3月27日に公益社団法人 日本化学会による化学遺産に認定されました。

《化学遺産認定資料》 計 14点

- ・「化学新書」 3冊(資料No1～3)
- ・「化学通」 1綴(資料No4)
- ・「雑記帖」 1冊(資料No11)
- ・袖鑑 Zakboek 1冊(資料No12)
- ・「雑記帖」 1冊(資料No14)
- ・談話随筆 1冊(資料No15)
- ・裕軒随筆 一 1冊(資料No20)
- ・裕軒随筆 二 1冊(資料No21)
- ・廣義摺立、化学通摺立、木挽町生居ノ時来学者ノ姓名、摂州三田ニテ開校ノ時来学者姓名〔録〕 1冊(資料No86)
- ・随筆 一 1冊(資料No91)
- ・「雑記書」 1冊(資料No92)
- ・写真 2枚(資料No186)
- ・裕軒先生真像 1幅(資料No187)
- ・兵家須読舎密真源 7冊(資料No190)



幸民は『気海観瀾広義』で銀板写真に言及しており、実際に嘉永4年(1851)に銀板写真の撮影に挑戦し成功している。

その10年後、咸臨丸の使節団が持ち帰った写真を湿板写真であると見抜き、手作りの材料で複製に成功した。幸民(左)、妻秀子(右)の湿板写真。

蘭学者…日本化学の祖… 川本幸民

川本幸民(文化7年(1810)ー明治4年(1871))は、三田藩(現在の兵庫県三田市)侍医の川本周安の息子として生まれました。幼い頃より天分に恵まれた幸民を認めた当時の三田藩主九鬼隆国に命ぜられ、文政12年(1829)江戸に留学し、足立長雋、坪井信道らに蘭学を学び、物理・化学に精通しました。

今回、認定された『化学新書』の中で、日本に初めて「化学」という言葉が登場します。この他にも幸民は、様々なオランダ語の書物の翻訳を通して数多くの業績を残しています。ビール、マッ

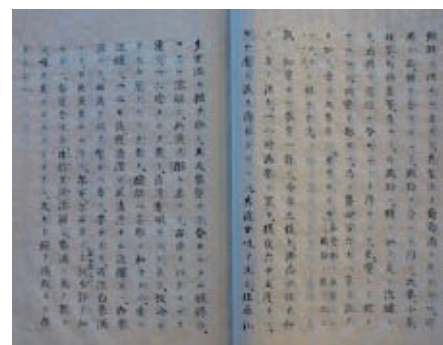
チ、カメラの試作、造船技術、蒸気車、ガス灯、電信機などの研究に及んでいます。

また、薩摩藩主島津斉彬との交友などもあり、文久2年(1862)には幕府の蕃書調所の教授となります。その後、明治元年(1868)に帰郷し、「英蘭塾」を開校しました。西洋の知識や技術を素早く取り入れ、物理・化学の研究・教育を通じて日本の近代化を進めました。

昨年、生誕200年を迎え、出身地の兵庫県三田市を中心に「幸民まつり」や「幸民検定」など様々なイベントが行われました。



川本幸民肖像画



『化学新書』に記されたビール醸造法

化学遺産認定とは…

公益社団法人 日本化学会の化学遺産委員会は、化学と化学技術に関する貴重な歴史資料の中でも特に貴重なものを認定し、文化遺産、産業遺産として次世代に伝え、化学に関する学術と教育の向上及び化学工業の発展に資することを目的としています。

平成23年度日本学士院賞

平成23年4月12日開催の第1048回総会において、平成23年度日本学士院賞の授賞が決定しました。第101回となる授賞式は6月に举行される予定です。



恩賜賞賜品
(御紋付銀花瓶)

恩賜賞・日本学士院賞

「『ヨハネの黙示録』に関する研究」

佐竹 明

広島大学名誉教授、フェリス女学院大学名誉教授

日独両語による浩瀚な注解書に結実した、「ヨハネの黙示録」に関する研究は、過去の研究遺産を引き継ぐものでありながらも、それを批判的に大きく越えており、比類なき学問性と斬新な問題提起のゆえに、国際的にも高く評価されている。



恩賜賞・日本学士院賞

「船舶の非線形造波に関する研究」

宮田 秀明

東京大学大学院工学系研究科教授

船が「自由表面衝撃波」という非線形な波を造ることを発見し、この現象を考慮したコンピューターシミュレーションによる設計法を開発し、使用燃料の節減により、経済的効果と環境負荷の低減に貢献した。



日本学士院賞賞牌

日本学士院賞

『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』

庄垣内 正弘

京都産業大学客員教授、京都大学名誉教授

本書は1907年敦煌から出土したウイグル文献中、最大にして且つ難解とされた安慧造「阿毘達磨俱舍論実義疏」(中国語訳からの重訳)を世界に先駆けて校訂し日本語訳したもので、国の内外で高い評価を受けている。





日本学士院賞

『藤原為家研究』

佐藤 恒雄

広島女学院大学文学部教授、香川大学名誉教授

藤原俊成・同定家の後継者として歌の家、御子左家(みこひだりけ)を守り、13世紀の宮廷歌壇の指導者として平明な和歌を首唱、冷泉家時雨亭(れいぜいけしぐれてい)文庫の典籍・文書の形成や伝来にも深く関わった為家、鎌倉時代中期の最も中心的な歌人の生涯と文学活動のすべてを解明した労作。

昨年度(第100回)授賞式の様子



受賞者より説明を受けられる両陛下



日本学士院賞

『法存立の歴史的基盤』

木庭 顕

東京大学大学院法学政治学研究科教授

暴力を使った者に得をさせない訴訟制度が、古代ローマで作られ出された過程を紀元前5世紀に遡って明らかにした作品。《平和な取引社会の原理》の起源を、精緻な史料分析と鋭い理論構成を駆使して鮮やかに描き出した。



受賞者記念写真



日本学士院賞

「純ツイスターD-加群の研究」

望月 拓郎

京都大学数理解析研究所准教授

層は局所と大域をつなぐ現代数学における重要な概念である。半単純な層に種々の操作を施せばどんどん複雑になり「半単純性」は崩れるという常識に反して、実は半単純な層に基本的な操作を施しても半単純であるという大定理を証明した。

日本学士院賞

「マントル最深部の物質とダイナミクスに関する研究」

廣瀬 敬

東京工業大学大学院理工学研究科教授

地球のマントル最下部の主要鉱物を発見するとともに、その領域の地震波異常の問題を解決し、さらにマントルの対流様式、地球自転速度の変動や自転軸のゆらぎを説明するなど、マントルの研究に大きく貢献した。



賞状及び賞牌を授与される受賞者

日本学士院賞

「糖鎖生物学、とくにN-結合型糖鎖の病気での重要性についての先駆的業績」

谷口 直之

(独)理化学研究所基幹研究所グループディレクター、
大阪大学産業科学研究所招へい教授、
大阪大学名誉教授

世界に先駆けて糖鎖を作る多くの重要な酵素の遺伝子を発見し、糖鎖が、がん細胞の転移性を変え、個体の成長や発育にかかわり、また病気の原因になることを発見した。さらに糖鎖を利用したがんの診断法や治療法の開発への基礎的な貢献をした。



授賞式後のパーティーで
会員と懇談する受賞者

日本学士院賞

「がん細胞における細胞シグナルとその制御機構に関する研究」

宮園 浩平

東京大学大学院医学系研究科教授・研究科長・医学部長

がんの抑制と進展の両方に関与するタンパク質TGF- β の受容体や細胞内シグナル伝達機構を明らかにし、がん細胞が増殖、浸潤、転移する分子機構を解明することによって、がんの基礎研究の発展に大きく貢献した。



第7回日本学士院学術奨励賞

平成23年2月14日開催の第1046回総会において、第7回日本学士院学術奨励賞の受賞者6名が決定され、3月3日に授賞式が挙行されました。



「微生物の多様なテルペノイド生合成機構の解明」

葛山 智久

東京大学生物生産工学研究センター 准教授

テルペノイドの新しい生合成経路に関わる各段階酵素の遺伝子を独自の工夫によってクローン化し、メチルエリスリトールリン酸(MEP)の合成に続く各中間体を精密な化学的手法によって同定することで、その全貌の解明に大きく貢献するとともに、MEP経路を分子標的とした創薬などの新しい応用の可能性を提示した。



受賞者に贈呈される賞状及び賞牌



「スピン流物理現象及び応用技術の開拓」

齊藤 英治

東北大学金属材料研究所 教授

逆スピンホール効果の発見及び体系的な研究によって、従来、検出が不可能であったスピン流の直接検出手法をはじめて発見し、定量することが可能になった。この発見は、近年世界規模で進められているスピン流のもたらす物性の実験研究の源流となっている。

日本学士院学術奨励賞は、若手研究者を顕彰してその研究意欲を高め、今後の一層の研究を奨励することを目的として実施しています。

本賞の選考は、独立行政法人日本学術振興会の日本学術振興会賞受賞者を対象として行っています。



「シロアリの社会生態の総合的解明とその応用」

松浦 健二

岡山大学大学院環境学研究科 准教授

単為生殖と有性生殖の使い分けによるシロアリ独自の女王継承システム、繁殖戦略と生態行動を明らかにするとともに、擬似卵を用いる革新的な害虫駆除技術確立し、今後の生物学や農学の発展に大きく貢献することが期待される。



秋篠宮同妃両殿下と記念写真



「国際法上の自衛権概念の歴史的展開」

森 肇志

東京大学大学院法学政治学研究科 准教授

国連憲章に規定された「個別的及び集団的自衛権」に関し、歴史的実証研究を行い、自衛権概念の区別が同憲章の制定過程の中で言及され、同条の基層をなすことを明らかにするなど、国際法上の自衛権概念の解明に寄与した。

「中世中東世界における
アレクサンドロス大王像の比較文学比較文化研究」

山中 由里子

人間文化研究機構国立民族学博物館 准教授

様々な言語で書かれた膨大な資料を渉猟し、アレクサンドロス大王像の言説の東方への伝播過程を辿り、聖人、破壊者、哲学王等の「顔」が形成された時期や背景、その理由を多面的に問う長大な著作を完成させた。



賞状及び賞牌を授与される受賞者

「半導体表面・界面科学を
基軸とした次世代エレクトロニクスの創成」

渡部 平司

大阪大学大学院工学研究科 教授

集束電子線を用いたナノ界面観測技術を考案、駆使し、次世代MOSデバイスの基礎となるSiO₂ゲート絶縁膜の設計指針を提示した。更にMOSデバイスの超低消費電力化を可能とする世界初のHigh-k絶縁膜搭載の高性能LSIの実用化に貢献し、次世代グリーンエレクトロニクスの開発に優れたインパクトを与えた。



肩書は授賞決定時(平成23年2月14日)

授賞理由等の詳細はホームページをご覧ください。(http://www.japan-acad.go.jp/)

＜学術奨励賞受賞者寄稿＞

「編集者に負うところ」

国立民族学博物館 山中 由里子



式典全景

人文系の研究においては、たとえ国際的な学術誌に論文を発表し続けても、分厚い単著を出版するまでは、どうやら一人前としては認めてもらえないようだ。中世イスラーム世界のアレクサンドロス像の変遷を、歴史書、宗教書、哲学書といった様々なジャンルのテキストの分析を通して明らかにしようという大風呂敷を広げた私は、それを一冊の書物にまとめるのに、思わぬ年数を要してしまった。この相当な分量の原稿を、細々とした注や文献リストも含めてそっ

くりそのまま、あまり売れそうもない「堅い」学術書として出版して下さった名古屋大学出版会の橘宗吾さんには、負うところが非常に大きい。実は同氏は、第5回日本学士院学術奨励賞を受賞された宮 紀子さんの大著『モンゴル時代の出版文化』の刊行にも携わった方である。担当した本の著者が二名、学士院学術奨励賞に選ばれたという編集者の橘さんこそ、顕彰に値すると思う。

講演会・記念展レポート

平成22年10月以降、本院主催により、3つの講演会等を開催しました。その様子をレポートします。

1 第53回公開講演会

開催日・場所 平成22年10月23日(日本学士院会館)

中野貞一郎会員が「医療事故と裁判 ―医療の進歩に裁判は対応していけるか」、野崎 一会員が「化学の功罪」と題して講演を行い、好評を博しました。

出席者は173名で、一般の方々のほか、専門家の方などの参加がありました。医療の倫理の問題は大変難しいと思った、有機合成化学の人間との関わりを垣間見ることができたなど、多くの感想が寄せられました。



質問を受ける野崎会員

2 イアン・ヒル・ニッシュ客員来日記念講演

開催日・場所 平成22年11月6日(日本学士院会館)

本院客員のイアン・ヒル・ニッシュ(Ian Hill Nish)教授(ロンドン大学名誉教授)は、「International reactions to Japan's Annexation of Korea, 1910」と題する講演を行い、講演には政治学や国際関係史を専門とする研究者など26名が参加しました。講演の後、北岡伸一教授(東京大学)などの参加者から質問が出され活発な意見交換が行われました。



ニッシュ客員講演風景

3 日本学士院特別講演会

学びのスメンシリーズ「放射能と放射線」

開催日・場所 平成22年12月11日(日本学士院会館)

本講演会は、将来を担う小中高生に、学問への憧憬を抱かせることを目的として計画され、今回は第三弾となります。

講師の山崎敏光会員は、東京大学や海外の研究所で活躍された、原子核物理と素粒子ビーム科学の分野での指導的な研究者であり、物理学の世界的権威です。多数の学術賞を受賞され、現在も研究を続けられており、平成21年には文化功労者に選定されました。

山崎会員は、小中学生を含む50名の出席者に、身の回りの放射線についてわかりやすく説明を行いました。講演の後実際に、実験器具を用いた宇宙線の観測や放射線の観察を行い、今まさに降り注いでいる宇宙線の光や、放射性物質から出される放射線を目にした参加者からは驚きの声が上がっていました。



講演する山崎会員



日本学士院授賞100周年記念展



平成22年10月5日から24日まで、本院を会場として「日本学士院授賞100周年記念展 —日本の学術とともに—」を開催しました。本記念展は、明治44年に第1回授賞式を行った日本学士院の授賞式が、平成22年に第100回を迎えたことを記念したものです。

展示会前半は、本院所蔵の資料の中から、東京国立博物館に寄託している江戸時代の儒学者等の書簡を集めた「先哲遺墨」や江戸時代の測量家、伊能忠敬の地図「大日本沿海輿地全図」、江戸時代に発展した日本独自の数学である和算に関する書籍などを展示しました。また、凸版印刷株式会社の協力を得て、「東京学士会院雑誌」に掲載された主な論文をパソコンで読んでいただけるようにしました。

展示会後半は、明治天皇の御下賜金に始まる授賞制度の創設に関する資料や、恩賜賞や帝国学士院賞など各賞の賞状、賞牌、新聞記事等を紹介しました。また、第1回受賞者木村榮博士など数名の受賞者の業績を紹介しました。受賞者のインタビューなどを元に構成した映像も上映し、来場者には興味深くご覧いただきました。

展覧会は、延べ746名の来場者を迎え、好評のうちに幕を閉じました。



授賞式風景

第26回国際生物学賞授賞式

平成22年12月6日、国際生物学賞委員会((独)日本学術振興会)主催による授賞式が本院を会場として挙行されました。

この賞は、昭和天皇の御在位60年と長年にわたる生物学の御研究を記念するとともに、本賞の発展に寄与されている今上天皇の長年にわたる魚類分類学(ハゼ類)の御研究を併せて記念し、生物学の奨励を図るものです。

今回の受賞者は、米国イエール大学・生態・進化生物学部門教授のナンシー・アン・モラーン博士です。

授賞式は、天皇皇后両陛下ご臨席の下、落ち着いた雰囲気の中で行われ、福山官房副長官(内閣総理大臣代理)、高木文部科学大臣からそれぞれ祝辞が述べられました。引き続き地階食堂で記念パーティーが行われ、盛会のうちに終了しました。

新会員選定

平成22年12月13日開催の第1044回総会において、日本学士院法第3条に基づき、次の12名を新たに日本学士院会員として選定しました。



富永 健一 （第1部第1分科）

専門分野: 社会学

現職: 東京大学名誉教授



東野 治之 （第1部第1分科）

専門分野: 日本史

現職: 奈良大学文学部教授、東京国立博物館客員研究員



小山 貞夫 （第1部第2分科）

専門分野: 西洋法制史

現職: 東北大学名誉教授



平井 宜雄 （第1部第2分科）

専門分野: 民法

現職: 東京大学名誉教授、専修大学法科大学院教授



藤田 昌久 （第1部第3分科）

専門分野: 都市・地域経済学(空間経済学)

現職: 甲南大学特別客員教授、(独)経済産業研究所所長、
京都大学経済研究所特任教授、京都大学名誉教授



益川 敏英 （第2部第4分科）

専門分野: 物理学

現職: 名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長、
京都産業大学益川塾教授・塾頭、京都大学名誉教授

<会員はこうして選ばれます>

1月 官報公示
学術機関、学会等からの会
員推薦受付開始

3月 会員選考開始

約8ヵ月にわたり厳正な審査が行わ
れます

12月 部会投票、総会承認を経
て新会員選定



会員選定状授与式の様子
(平成22年12月20日)





黒岩 常祥 （第2部第4分科）

専門分野: 生物科学

現職: 立教大学大学院理学研究科特任教授・極限生命情報研究センター長、東京大学名誉教授



小林 誠 （第2部第4分科）

専門分野: 物理学

現職: (独)日本学術振興会理事、高エネルギー加速器研究機構特別栄誉教授、総合研究大学院大学名誉教授、名古屋大学特別教授



長田 重一 （第2部第4分科）

専門分野: 分子生物学

現職: 京都大学大学院医学研究科教授



霜田 光一 （第2部第5分科）

専門分野: 物理学

現職: 東京大学名誉教授



内田 祥哉 （第2部第5分科）

専門分野: 建築学

現職: 工学院大学特任教授、金沢美術工芸大学客員教授、東京大学名誉教授



飯島 澄男 （第2部第5分科）

専門分野: 物質科学

現職: 名城大学大学院理工学研究科教授、(独)産業技術総合研究所ナノチューブ応用研究センター長、日本電気株式会社特別主席研究員、名古屋大学特別招へい教授

(会員寄稿) 寺田寅彦※雑感

高校の国語の教科書に寺田寅彦の随筆があった。色づいた秋の銀杏を眺めていると、一陣の風が吹くでもなく、何のきっかけもないのに、多くの木々が、突然、言合せたように、同時に落葉を降らせる、何故だろう？という趣旨のものであった。これが60年の歳月を生き永らえて私の頭に残っていたのと、「猫」の寒月君がからかわれながらも、端倪(たんげい)すべからざる独自の存在として描かれているのに興味を持って、某日思い立って、寅彦を少し纏めて読んで見ることにした。小宮豊隆編集の岩波文庫、5冊の寅彦随筆集を少しずつ、数ヶ月掛けて読み通した。小学生以来、興味に任せた手当たり次第の濫読が習い性となっている私であるが、読むに値したと思う。

社会、芸術、科学、哲学、文学、全ての文化活動に広い視野を持ち、驕ることなく謙虚に観察し、静かに、然し、誰にも遠慮せず、自分自身の意見を述べている。寒月君、なかなかのものだと感服した。私は、本を読みながら、同感した点、反論したい点、あとで引用したい点、などのあるページ番号を本の扉に書き込む癖があるが、この随筆集、どの巻も、扉ページは書き込みでぎっしりになった。

彼が、諸々の社会現象を科学者の目で見てコメントした内容は現在でもそのまま通用するものが多い。彼は似非科学に惑わされない、物の本質を見抜く目を持っていた。それは同時に人間の進歩などと言うものが如何に遅々としたものであるかを我々に思い知らせるものでもある。寅彦から間もなく100年を関する現在、我々の周囲の似非科学の跳梁は目を覆うものがある。間もなく生誕200年になるクロード・ベルナール(Claude Bernard)を読み返しても、私は同じ感慨を持つ。因みに、私が記憶していた銀杏の葉が風もないのに言合せたように一斉に落ちる話は「藤の実」という随筆の一部である事も判って、私は大変満足した。

明治の終り近く、寅彦はヨーロッパへ

の船旅を紀行と言うほどに丹念ではないが、日記に近い形で記録している。当時のことであるから、南アジアのあちこちに寄港して、インド洋を渡り、紅海からスエズ運河を抜けて地中海に入り、シシリー島とレジョ・カラブリアの間の海峡を通して、ジェノアに上陸、そこからドイツまで陸路を行く途中、シャモニーに滞在し、モンブランの氷河に登ったとある。あの当時、シャモニーとクールマイヤーを結ぶ今のケーブルカーがあったとは思えないから、実際にどれだけ「登った」のかは判らないのだが、降りる時に「滑らないように」靴の上に靴下を履いて降りた(!!)、というから、気軽なハイキング以上のものではなかったのだろう。

山を降りる途中で、とあるレストランの前を通り過ぎたら、呼び止められて「日本人か？ 自分はウエストンという英国人だが、日本に9年間住み、富士山には六回登った」という人物に出会った、と言う記述がある。寅彦は全く偶然に、上高地を「発見」したことになるあのウエストンにモンブランの氷河の上で出会ったのだろうか？ 最後まで、ウエストンの何者であるかを知らなかったのだろうか？ 私山屋のはしくれである。これは捨て置けない。日本百名山を二回、三百名山を一回やった日本山岳会会員で私とは医学部同級の元東大医学部長、鴨下重彦に意見を徴した。「お前も結構 しつっこいな」という出だしの返事が来て、資料を渉猟した結果、ウエストンが日本に滞在した期間、寅彦がヨーロッパへ行った時期、などを照し合せると、寅彦が会ったのは、ウォルター・ウエストン(Walter Weston)その人に間違いあるまい、と言うことであった。寺田寅彦とWalter Westonという二人の「著名人」が「只の人」として、全く偶然にフランスの山の中で出会って、恐らく最後まで、お互いに相手の何者であるかを知らなかったということらしい。考えてみれば、それが一番自然な流れであって、それを面白いと思う後世の我々が変なのかも知れない。

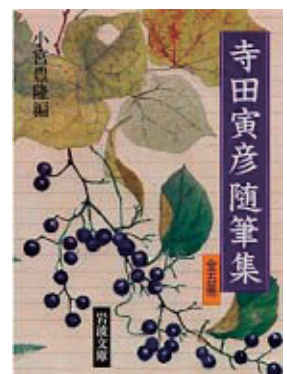


鈴木 邦彦 会員
(第2部第7分科)

1932年 東京府下荏原郡、現在の
大田区大森近辺に生れる。55年 東京大学教養学部 教養学科 科学史・科学哲学分科卒業。59年 同大学 医学部医学科卒業。60年6月 榊美智子さんが安保デモで亡くなった日に横浜を出港、アルバートアイ
ンシュタイン医科大学、ペンシル
ヴァニア大学を経て、86年より2002
年までノースカロライナ大学。2007
年に47年間住んだ米国を後に帰国。趣味は、渡米まで日本野鳥の
会東京支部幹事、山登り、写真、現
代音楽。長所、短所共に、鵠外に強い
親近感を持ち、鵠外全集は芥川
全集、漱石全集、謡曲全集などと共
に半世紀を掛けて太平洋を往復し
た。

平成20年12月、日本学士院会員

※寺田寅彦(1878-1935)
物理学者、随筆家、俳人、夏目漱石の弟
子、恩賜賞受賞、帝国学士院会員。



『寺田寅彦随筆集』全5巻
小宮豊隆 編(岩波文庫)
1947年～48年発行

所蔵資料の紹介(藤田貞資関係資料)

このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介します。

第7回は和算資料の中から「藤田貞資関係資料」を取り上げます。

藤田貞資は、世界的にも高度な発達を遂げた和算のうち、関流の宗統として多彩な活動を行い、多くの門弟と著作を通じてその全国的な伝播にきわめて大きな役割を果たしました。

藤田貞資関係資料は貞資の業績をうかがわせるとともに、江戸時代中期における和算の相伝と普及の実態を物語る一括資料としてわが国数学史上価値の高いものです。

明治39(1906)年7月8日、第2回総会において、菊池大麓会員が和算史編纂のための調査事業を提案して以来、本院が蒐集した和算資料は20,976点に及んでいます。藤田貞資関係資料は、大正7(1918)年6月に貞資の子孫藤田菊弥氏より寄贈されました。平成5(1993)年6月10日に重要文化財(歴史資料の部)に指定されました。

《所蔵資料》

ー 藤田貞資関係資料ー 138点



『日時計(時刻計)』

外環径7.6 外環幅0.6 内環径6.5 内環幅0.55

外環に“Brest 48 23 Toulon 43 07 Rome 41 54 Lion 45 46 Orleans 47 54 Calais 51 00 Bordeaux 44 50 Paris 48 51 Nantes 47 13”内環に“Rennes 47 58 Rouen 49 27 St Malo 48 35 Venise 45 33 Gennes 44 27 Turin 44 9 Diep □ □ 56 Le Havre de Grace □ □ 31”と緯度の刻銘あり。

『精要算法解義』

主著『精要算法』に貞資自ら解説を加えたものである。『精要算法』は、関流算法の諸術の中から問題を精選して例題を作成し、平易に解説した教科書的な和算書として人気を集め、関流の普及に大きな役割を果たした。



藤田貞資〔ふじた さだすけ〕(1734-1807)

江戸中期の和算家。享保19年(1734)、武蔵国男衾郡本田村(現在の埼玉県深谷市)で郷士本田親天の子として生まれる。後に、新庄藩主永井家の藤田定之の養子となる。

宝暦12年(1762)、幕府天文方で関流算法の第一人者である山路主住(1704-1772)の作暦手伝となり、江戸に住み、暦作や測量に従事する。しかし、明和4年(1767)に眼病のため天文方手伝を退き翌年、久留米藩主であり、関流の和算家としても知られている有馬頼懂(1714-1783)に召抱えられ二十人扶持を受けた。出版した『精要算法』を巡って最上流の会田安明(1747-1817)と論争をする。

文化4年(1807)、病のため74歳で没している。

第54回公開講演会のお知らせ

平成23年5月28日(土)、第54回公開講演会を松山大学(愛媛県松山市)において開催します。

石井寛治会員が「再考・維新経済史—権力・商人・民衆」、和田光史会員が「土壌による炭素貯留と地球温暖化」というタイトルでそれぞれ講演を行います。

再考・維新経済史—権力・商人・民衆

石井寛治

列強の外圧に対して、「攘夷か開国か」を激しく争った幕末日本の人々は、「攘夷のための開国」路線を選びながら権力を変革した。商品貿易と技術導入により産業革命を行うさいの資金面での担い手の中心は近世以来の商人であった。小生産者の成長による「民衆的対応」では欧米との巨大な技術格差を埋められず、中国洋務派のような「権力的対応」も民間の力を活かせずに挫折し、外国商人の活動を居留地内に閉じ込めた日本の「商人的対応」のみが、アジア初の産業革命への道を切り開いた。勝海舟や坂本竜馬の言動に象徴される独特な「攘夷のための開国」路線を辿った維新変革を見直し、それを経済面で支えた「商人的対応」の姿を、全国と愛媛の事例に即して考えたい。

土壌による炭素貯留と地球温暖化

和田光史

化石燃料の使用による大気CO₂増加が地球温暖化をもたらすことが問題になっている。地球上で、光合成によってCO₂から有機物をつくる植物を経由して、土壌に入り、有機物として貯留される炭素の総量は、大気と植物に存在している炭素の総量を超え、現在の大気CO₂増加による温暖化は、1年に土壌の炭素総量の0.2%相当分が増加すれば解消する。

しかし、これを達成するにはいろいろ問題がある。土壌の炭素貯留量は、土壌の種類によって大きく異なる。また、森林を伐採して農地にすれば、土壌の有機物は数十年で2/3～1/3に減少する。土壌の有機物は微生物による分解によって植物に栄養を与える働きに注目して研究されてきたが、CO₂を大気から隔離・貯留して地球温暖化を抑制する働きに注目した新しい研究が展開されている。この講演では世界の土壌の炭素貯留能とその増強についての展望を試みる。



《開催日時》平成23年5月28日 午後1時～4時10分

《場所》松山大学8学館820番教室

《共催》松山大学

《後援》愛媛大学

入場無料

必要事項を記入の上、下記まで事前にお申し込みください。定員200名、先着順。

＜申込方法＞ 日本学士院ホームページから、または、E-mail、FAX、往復ハガキ

＜必要事項＞ 氏名(フリガナ)、住所、電話番号等連絡先

日本学士院公開講演会係 (〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32)

TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105

E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp

http://www.japan-acad.go.jp/

外国アカデミー等との交流

ロンドン王立協会を始め、9カ国10機関と交流協定を結び相互訪問等を実施するほか、海外の学術団体等との学術交流を促進しています。

区分・相手先		会 員 等 氏 名	期 間
受入	表敬訪問 ドミニカ共和国アカデミー	Nelson Moreno-Ceballos Lic. Cecilia Caballero de Moreno	22.10.15
	客員招聘	Ian Hill Nish 客員	22.10.25～11.16
	表敬訪問 国際学士院連合	Jean-Luc De Paepe UAI副事務総長	22.11.17
	表敬訪問	Massimo Livi Bacci 客員	23.1.7

会館施設の利用案内

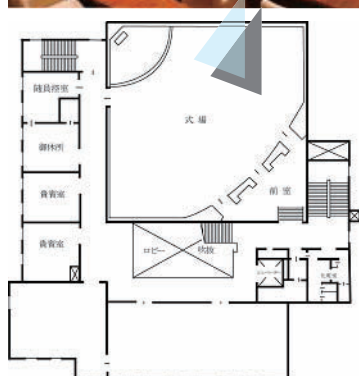


建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小6つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合わせください。

(平成22年10月以降の会館利用状況)

利用年月日	利 用 目 的 ・ 内 容
平成22年11月19日	第10回山崎貞一賞贈呈式
平成22年12月 6日	第26回国際生物学賞授賞式
平成23年 2月 1日	第1回育志賞授賞式
平成23年 3月 3日	第7回日本学術振興会賞・日本学士院学術奨励賞授賞式



寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、学術の振興に資する事業を実施しています。寄付の手続きについては、会計係までお問い合わせください。

<平成22年度受入実績>

受入年月	個人・団体名	金 額
平成22年 6月	公益財団法人原田積善会	500,000円

会員・客員の逝去

平成22年10月以降、以下の方々が逝去されました。

<会 員>

三ヶ月 章会員 (第2分科)

伊藤 正己会員 (第2分科)

本多 健一会員 (第5分科)

平成22年11月14日

享年89歳

平成22年12月27日

享年91歳

平成23年 2月26日

享年85歳



シンボルマークの由来

『古事記』において「長鳴鳥(ながなきどり)」は、知恵の神である思金神(おもいかね)が天の岩屋戸を開くために鳴かせたと記され、黎明を告げる鳥として伝えられています。本院の恩賜賞(当時)と帝国学士院賞(現日本学士院賞)の賞牌をデザインした坪井正五郎会員は、長鳴鳥に自然界の物の性質を考え究め事に応じて用いるとの意を込め図案に用いました。それ故、本院では長鳴鳥をシンボルマークとしています。

編集後記

今回発行しました第7号のニュースレターでは、平成23年度日本学士院賞受賞者の業績紹介や、第7回学術奨励賞に関する受賞者紹介及び寄稿のほか、講演会や記念展の様態などをお伝えいたします。

ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

さて、今年のスギ・ヒノキ花粉飛散予測数は、関東地方で昨年の約6倍と予測されているそうです。梅や桜の咲く良い季節なのに毎年憂鬱になります。マスクに鼻炎薬や目薬等こまめに対応していきたいと思います。

台東区や墨田区で地元にとって嬉しいニュースがありました。一つは、建設が進む東京スカイツリーが3月1日、600メートルを超え、未完成ながら自立式電波塔として世界一の高さになったそうです。もう一つは、上野動物園が受け入れたジャイアントパンダのつがい2頭が2月21日、中国・成都から同動物園に着き、新しい環境に慣れさせた後、3月から一般公開となります。約3年ぶりのパンダ復活に、関係者は来園者増加へ期待を寄せているそうです。

墨田区と言えば両国国技館がありますが、先般、大相撲の八百長問題がありました。大相撲野球賭博の捜査の過程で力士から押収した携帯電話から八百長問題が発覚し、今年の春場所が中止になり、又、協会による調査が行われているそうです。早期に真相究明と再発防止を図り、我が国の国技である大相撲が健全化されることを願ってや

みません。

私が前職の時に近づくになった茨城大学准教授の磯田道史先生は、映画化された「武士の家計簿」の原作者としても有名ですが、先生から頂いた著書によると八百長は、明治時代、わいろの意味で使われていたそうです。八百屋の根本長造が囲碁仲間として伊勢の海親方に取り入り、野菜を大量に売ることができ裕福になったが、囲碁の名手・本因坊と長造が対局しているところを後ろから伊勢の海親方が見ていると、いつものヘボな碁と違い見事な碁を打っているの、親方が怒りそのことを相撲界に吹聴したことから、親方への接待わいろの事を相撲界では八百長と言うようになったとのこと。

現代での八百長は、示し合わせてインチキ(勝ち負けを配分)することですが、時代によって言葉の意味も違っていったのですね。

※八百長の由来については、他にも様々な説があるようです。

終わりに、本ニュースレターの編集後に東北地方太平洋沖地震が発生しました。お亡くなりになった方やそのご家族には深い哀悼の意を表しますとともに、怪我や病気で苦しんでおられる方々には、一日でも早い回復を心からお祈り申し上げます。また、各国からの援助に感謝しつつ、国民の一人として出来る限りの協力をしたいと考えています。

(A)

◎お問い合わせ先

日本学士院

〒110-0007

東京都台東区上野公園7-32

電話: (03)3822-2101

FAX: (03)3822-2105

E-mail: jimujapan-acad.go.jp

第7号: 発行日: 2011. 4. 25
(年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>